夫君に恋ふる歌一首　并せて短歌

三八一一番

さにつらふ　君がみ言と　玉梓の　使ひも来ねば
思ひ病む　我が身ひとつそ　ちはやぶる　神にも
な負ほせ　占部する亀　亀もな焼きそ　恋ひしくに
痛き我が身そ　いちしろく　身にしみ通り　むら
肝の　心砕けて　死なむ命　にはかになりぬ
今更に　君か我を呼ぶ　たらちねの　母の命か
百足らず　八十の衢に　夕占にも　占にもそ問ふ
死ぬべき我がゆゑ

反歌

三八一二番

占部をも　八十の衢も　占問へど　君を相見む
たどき知らずも